

1. 実況上の着目点

- ① 前線が本州の南岸付近から日本の東へ伸びている。前線近傍とその北側に降水が広がり、本州の南海上では、激しい雨を解析し、発雷を検知。
- ② 日本海の高気圧が東へ移動。日本の東の高気圧がほとんど停滞。①の前線は、これらの高気圧の間で、ほとんど停滞している。
- ③ 南西諸島付近には、気圧の谷がのびて、南西諸島付近の海上で激しい雨を解析。
- ④ 500hPa 5520m付近で-21℃以下の寒気を伴うトラフが、アムール川中流を東進。500hPa 5760m付近で-15℃以下の寒気を伴うトラフが、朝鮮半島付近を東進。



主要じょう乱解説図

2. 主要じょう乱の予想根拠と防災事項を含む解説上の留意点

- ① 1項①の前線は、12日夜にかけて本州の南岸付近をゆっくり南下する。1項②の日本海の高気圧は12日夜にかけて北海道の南東海上へ移動し、1項③の日本の東の高気圧は11日朝までに不明瞭化する。12日朝には新たに日本のはるか東で高気圧が発生し、その後、ゆっくり南東へ移動する。これらの高気圧の張り出しの影響で、12日は次第に前線活動が衰弱する。1項④のアムール川中流付近のトラフに対応した低気圧が11日朝までに沿海州で発生し、12日夜にかけてオホーツク海を通り、カムチャツカ半島付近へ進む。この低気圧付近から南西に気圧の谷がのびて、12日は気圧の谷が北海道付近を通過する。1項④の朝鮮半島付近のトラフが、11日夜にかけて日本の東へ進み、北日本の上空に寒気が広がる。前線や気圧の谷に向かう下層暖湿気及び上空の寒気の影響で、大気の状態が非常に不安定となり、雷を伴う激しい雨の降る所がある。これまでの大雨で地盤が緩み、少ない雨量でも土砂災害の危険度が高まる地域がある。関東甲信地方では11日は、土砂災害に厳重に警戒し、東日本太平洋側では11日は、低い土地の浸水、土砂災害、河川の増水に注意・警戒。全国的に12日にかけて、落雷、突風、降ひょう、急な強い雨に注意し、局地的には竜巻などの激しい突風に注意。
- ② 13日は、2項①の前線は、本州の南岸付近から北～西日本の日本海側沿岸に、ゆっくり北上する。2項①の北海道の南東海上の高気圧は、千島の東へ移動する。前線に向かう下層暖湿気や高気圧の縁辺から流れ込む下層暖湿気の影響で、大気の状態が不安定となる所がある。東～西日本と南西諸島では13日は、落雷、突風、降ひょう、急な強い雨に注意し、大雨となる可能性に留意。高気圧の縁辺の吹送距離、吹続時間の長い東寄りの風の影響で、波が高くなる所がある。南西諸島では13日は、うねりを伴う高波に注意。

3. 数値予報資料解釈上の留意点 総観場はGSMを基本、量的予想や降水分布はMSMやLFMも参考。

- 4. 防災関連事項 [量的予報等]** ①雨量(06時から24時間): 多い所(100mm以上)はない。②波浪(明日まで): 高い所(3m以上)はない。

5. 全般気象解説情報発表の有無 発表の予定はない。